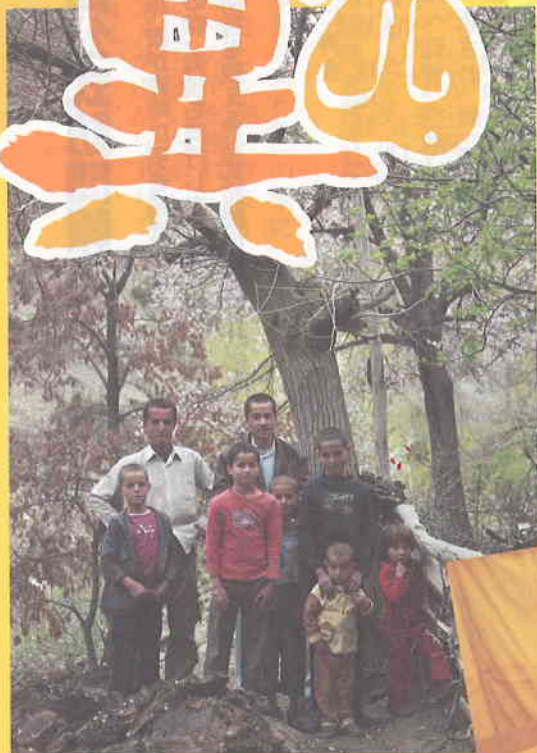
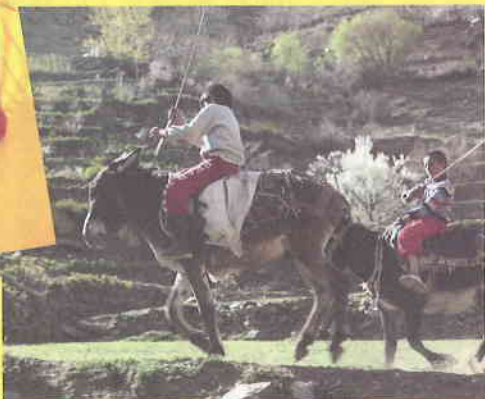


アフガニスタン 翼・ばあーる



第7回 公式訪問報告



第7回 総会&現地報告会

【東京】9月25日(土):武蔵野芸能劇場

【大阪】10月2日(土):高槻現代劇場・文化ホール展示室

参加お申し込み、お待ちしております！

皆様、お元気でお過ごしでしょうか。私と運営委員2名は4月17日、「山の学校」への公式訪問を無事に終え帰国いたしました。

子どもたちが元気でいたことが何よりの喜びでした。訪れるたびに、人々は心を開いてくれるのを感じます。今回、初めて、子どもと一緒に写真に納まってくれる母親が現れました。

誰もが「お茶を飲んでいかないか」と声をかけてくれ、遠慮していると、表までお茶やヨーグルト、クルミなどを運んでくれます。

支援を始めて7年。いつも感じるのは平和と復興への強い願いです。しかし、それが実現できるかどうかは国際社会がどう関わっていくかにかかっていると思います。これからも、アフガニスタンの平和を念じながら、交流を続けていくつもりです。

長谷川洋海

第7回公式訪問報告

4月、長倉代表が昨年に引き続き現地へ。運営委員の森、高橋も同行しました。今年で7回目を数える公式訪問の様子を代表からご報告します。

●サフダルに再会

4月4日昼、成田発。ニューデリーに1泊して、5日夕、首都カプールへ到着。空港は日本の援助で一新され、新しい制服の職員もキビキビしていて、昨年までの混乱が嘘のようだ。入国手続きもスムーズ。しかし、表は自爆テロ警戒のため駐車禁止。遠くの駐車場まで、荷物満載のカートを押して歩く。

駐車場の前で、サフダル校長が手を振っている。気の毒なほど痩せているが、満面の笑みだ。早速、タクシーで安井さんの家に向かうが、車中で、サフダルが辜丸の病気で入院・手術をしていたことを知る。

●カプール到着

再会した安井さんも元気でひと安心。安井さんは共同通信通信員でもあり、日本人記者の誘拐事件ででてこ舞いだつたが、ノートやザックを買っておいでくれたので助かる。

サフダルと一緒に買い物へ。街には高い建物が次々に建てられ、活気にあふれている。簡単にシヨールをまとっただけのおしゃれな服装の女性たちが大勢歩いている。国語辞典やダ



新校舎の前で

リ語Ⅱ英語辞典、果物や動物の絵に英単語が添えられた壁掛け教材、黒板消し、筆記具などを買い足す。書店にはタウンガイドが無料配布されていて、中を見ると、最近オープンした安井さんの日本料理店と巻き寿司が写真入りで紹介されていた。ダリ語の図書を購入する際、サフダルが「これはあるからいいから」と明確に言い当てる。学校の図書をすべて把握しているのに驚いた。しかし、しんどいのかすぐにイスに腰を落とす。家に戻ると、ダウドハーンが

私を尋ねてやってきた。彼は抵抗運動の指導者マスードの副官だったが、いまは内務副大臣を務める。「当時の仲間たちはみな結婚をした。大学に行った者もいる」と話してくれる。しかし、現在の混乱については、「みな長い戦いに疲れている。一刻も早く平和を実現しなければ」と話した。

翌7日、ヤシン先生の弟、アクバルが運転する車でパンシールへ向かう。アクバルは3年前、カンダハールで爆破テロに巻き込まれ意識不明の重傷になったが、奇跡的な回復を遂げていた。しかし、体には破片が残り、足も引きずっている。100万円近くの医療費を借金して工面したらしい。

3時間ほどでパンシールに到着。マスードの廟に花を添え、昨年亡くなったサーズデインの墓に向く。山の学校支援を日に陰に支えてくれた人物だ。彼は、マスードの廟がよく見える高台に父親の墓に寄り添うように葬られていた。

●学校へ

学校到着は正午を過ぎてしまい、生徒はすでに下校している。スワニーさんからの手袋や三色ボールペンなどが入ったダンボールを校舎に入れて、宿泊先のサフダルの家に向かう。サフダルも一緒だが、痛みが激しくなったらしく、明日カプールの病院に行くという。

翌8日、やっと生徒たちと再会できた。みな笑顔を浮かべて握手を求めてくる。今年の7年生は、初めて出会った時には、1年生だった。当時の幼かった姿が思い起こされる。

さつそく各教室を訪ね、持参した文房具を配り、購入したばかりの百科事典を紹介する。みな、新しい図書を楽しみに待っていたらしい。そのあとの交流パーティーでは、ケーキ、甘いお菓子、みかん、ジュースを前に、だれもがうれしそうにしている。

学校では、昨年、辞めたナフィサの後任フアタナ先生、そして新任のハーンミルザー先生とも会うことができた。教師は現在10名。ほかにサフダル校長(数学も担当)と3人の用務員さんで職員は14名だ。量販店で買った、高級に見える腕時計をプレゼントすると、どの先生も喜んでくれた。



村に電気がくるようになった、電気ストロブの灯りの前で勉強する。

広がれ！パネル展のゆ

○5月9日、事務局の近くの小平中央公園・雑木林内でのイベント「プレパーク」で本会の活動を紹介しました。昨年の総会で使った「山の学校」の子どもたちのカラージュパネルや今春訪問したスタッフが撮った写真などをダンボールボードに貼ったり、木と木の間に張った麻糸につり下げたりしました。お天気に恵まれ風もなく緑の大きなドームのようなゆったりとした雰囲気。イベントに参加された方々が展示を熱心に見て話も聞いてくださいました。親子連れや友だち同士が話をしながら楽しんで見ているのが印象的でした。本会の紹介チラシを配り、カンパもいただきました。(比留川征子)

○5月29・30日に、山の学校への支援のためのイベント「はれるやマーケット」を市民有志の実行委員会の主催で釧路市で開催しました。今年で3回目の企画で、今回は飲食や雑貨店、市民のフリーマーケットやプロの出店のみなさん60店が出展してくれました。各店には、「山の学校の会」のチラシを掲げ、子どもたちの元気な笑顔も紹介し、大勢の市民でにぎわいました。出店の皆さんから売上金の中から総額約5万円の寄付が寄せられました。一歩ずつではありますが、釧路のみなさんに山の学校の姿が伝わってきたように思います。(寄稿：宿谷友美さん)



のお菓子を持たせておいて良かった。月に5日、村の羊を一日中、放牧させる日がある。父親の足が不自由なため、2人が学校を休んで山に入る。「将来は大統領になりたい」とサミールは話していたが、夢が叶うだろうか。

●人々の生活

ポーランドはちょうど、杏の花盛り。淡いピンクの花が満開で美しい。

9日は金曜でイスラムの休日だったが、子どもたちは働いていた。羊や牛の世話はもちろん、女の子は肥料になる牛糞を口バに積み、畑まで出向く。男の子は畑を作るため、地面から岩をとりのぞき、大きな石はハンマーで割っていく。アフガニスタンならではの過酷な労働だ。

政府支給の先生の給与がアップしたのもうれしいニュース。平均50ドルから70ドルにアップし、研修が終わった先生にはさらに20ドルがアップされるという。もっと、驚いたのは、職員室にはコンピュータが1台あったこと。教育省から供与されたという。しかし操作方法がわからないため、ダンボールに入ったまま。サフダルはいずれ首都から講師を招きたいと話す。

放課後、アミン(6年)の家に向かう。「アミンと弟のサミール(5年)は村の羊を連れて山に入っている」と聞いたからだ。5時半に、2人が山から下りて来た。昼ご飯はナンだけだったという。姉のナフィサに交流会

しまふ計算だ。肉を食べるのは週に一度。家の羊や鶏を食べるという。

●再び、学校

10日(土)。風邪が流行っていて欠席者が多い。天候不順のせいなのだろうか。昨日は雨が降り雷も鳴った。今年は例年より山の雪も少なかったから水不足が心配だ。

休み時間にスワニーさんかいらいだいた手袋を配る。丈夫でおしゃれな手袋をもらうのを子どもたちはとても楽しみにしている。そのあと、昨年撮った写真を渡し、教室に会報と日本の子どもが描いた絵入りのカレンダーを貼る。「こんな描

モスクの修復をする人たちに、シュワイブがお茶を運んできた。



用務員のモハマドイン(54歳)の家に招かれた。家の周りには大きな杏が整然と植えられ、のどかで美しい。子どもは11人、年長の7人が山の学校に通っているという。大家族の食費を聞いてみた。米は月に35キロ、28000アフガニー(58000円)。ほかにパンの材料になる小麦が同じく35キロ、こちらは最近値下がりしたが、それでも14000アフガニーかかる。ほかにも20リットルほどの食用油を使う。食費だけで給料は飛んで

き方もあるんだ」と刺激を受けてほしいからだ。山の学校の写真が3枚入ったJVCのカレンダーも人気があった。子どもたちは世界のさまざまな生活や同年代の子どもの姿に瞳を輝かせて見入っている。

新1年生や転校生たちを加えた名簿用の撮影も終わった13日、サフダルがやっと、帰って来た。込み入った話の通訳をお願いしている安井さんも来てくれた。サフダルは痛みがなくなつたせいかわ、招待されたカリマ先生の家でも肉をもらいもり食べていたので安心した。

●生活の改善

ガーウインという村落では村人総出で村のモスクを修復していた。近くにはカブルの出身者が新しく大きな家を建設中。夏場だけ帰ってくるという。かつては200家族がいた村も今は5戸を数えるのみ。それでも、人々は畑を切り開き、杏やリンゴの苗を植え始めている。そんな村に水の流れを利用した電気が届くようになった。パンシール上流のシヨウワでは「パンシールの水」と名付けられたミネラルウォーターが作られ、カブルでも発売されていた。これも、地域の経済を活性化させてくれるだろう。治安の悪化はあるが、その一方で、少しずつ生活の改善と復興が進んでいると実感した今回の訪問だった。

ポーランドの小さな仲間たち

| 新任の先生 | | ラハマトラーくん 7歳(1年) | ハリーダちゃん 8歳(1年) | シュクリアちゃん 6歳(1年) | サードくん 7歳(1年) |
|-----------|--------|--------------------|-------------------|--------------------|-----------------|
| | | | | | |
| ハーンミルザー先生 | ファタナ先生 | | | | |

《現地報告番外篇》

ヤシン家での休日の一日

学校がお休みだった日、森桂子・高橋美香の2人は下の町バザラックで過ごしました。山の上に滞在していた長倉代表と別行動だったこの日はヤシン先生一家の皆さんにお世話になりました。その様子をお伝えいたします。

(取材・文責/編集部)

◎ ヤシン先生はサフダル校長の補佐役的な存在です。学校では、さまざまな教科を各クラスで教えている優秀な先生。「ほんとうに人当たりもいいし、相手のことをいつも思いやって動く人」と森。そして家では6人の男の子、3人の女の子のお父さん！ 英語を学習中の中学生の息子さんたちとは、教科書を見せてもらいながら、カタコトの英語でも交流したそうです。ヤシン先生の弟のアクバルも毎日車で学校まで送り迎えをしてくれました。今回「訪問できない季節の学校の様子や日常生活の写真を先生や生徒たちに撮ってもらったから楽しいんじゃないか」ということで山の学校の経費でデジタルカメラ1台を買い、森の古い物も1台提供し渡したのですが、その使い初めとしてヤシン先生がこの日の様子を撮ってくれました！ ヤシン先生は「カメラの使い方を覚えるのがとても早くて、他の皆に教えていた」(高橋)そうです。

◎ 今回、泊った宿(バザラックで初めてできた宿泊施設がいろんな点で居心地が悪いところで(突然電気を消されたり、ネズミの大運動会で眠れなかったり...)、その事情を知ったヤシン先生は何も言わずに自分の家に2人を案内し、夕ご飯をごちそうしてくれました。そのうえ、夜になり、そろそろおいとまの時間になったとき、家族全員で「泊まっていけばいいよ」とすすめてくれたのです。(翌日の荷物を取りに戻った宿への往復の車に同乗した子どもたちはしやぎつぷりはまるで修学旅行の生徒のようだったそう！(たしかに子どもにとつて「お客さんが泊まる」というのは「ハレ」の行事ですよ。))

◎ けれども、2人は朝起きてびっくりしたのでした。二間しかない部屋の大きいほうに森・高橋とそのお世話係として娘さん2人(計4人)が寝て、小さい部屋に男性陣10人で寝ており、さらに「夜は寒いから」と、お客にはありったけの布団をかけて、自分たちは毛布一枚にくるまっていたのです。夜はとにかく暗いので寝るときには状況がわからなかったとはいえ、あれはほんとうに申し訳ないことをしてしまった、と。

◎ ヤシン先生の家は以前、大雨のあとの地震で倒壊してしまい、いまは親戚の家を借りている状態です。申し訳ない気持ちとともに、この一家のさりげないやさしさに深く感謝したのでした。

※この写真は交流会会場にて展示する予定です。



カメラをかまえるヤシン先生(写真・高橋美香)

今回の訪問で印象的だったこと

・9年生(日本でいう中3)の女の子に「来年度卒業したらどうするの？」ときくと、下の町の高校へ通うと答える子が多かったこと。山の学校の周辺でも親を含めて、意識や価値観が変わってきてるように感じた。きつと、新しい女性教師が、高校を優秀な成績で卒業してすぐに赴任してきて、ちゃんと稼いでいるのを間近でみたりして、将来に具体的な希望がもてるようになったのではないかとと思う。この(支援開始からの)7年間の変化は大きく、いい方向に変わってきてるなあと感じた。

・訪問してしばらくは若い女性教師たちがいつも遠くで離れていてそっけない感じ、なかなか話せなかったのだが、これは「男性の前だから」という事情があったゆえで、その後さまざまなシーンで女性だけで会話をする機会があり、実は、好奇心いっぱいでも利発な女性たちなのだということがわかった。

総会・現地報告会にぜひご参加ください!

バシール・モハバット氏 講演会

わが心のアフガニスタン
—簡単なアフガニスタンの歴史・文化・教育とこれからの未来—



駐日アフガニスタン大使館次席代表のバシールさんに、子ども時代の思い出などを織りまぜながら、わかりやすくアフガニスタンという国を紹介していただきます。戦争の前/後を含めたアフガニスタンのむかしと今、そして未来について、スライドとともにお話いただく予定です。

交流会の会場には長倉代表の写真のほか、子どもたちの絵、子どもたちの撮った写真も展示いたします。今回の訪問の際に現地の様子を撮ってきた映像もありますので、お楽しみに!

また、本誌「ムルサルさんのカプール通信」でおなじみの安井浩美さんのお店で取り扱うアフガニスタングッズもございます。

事務局から

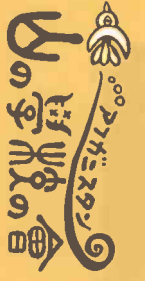
● 第7回総会・現地報告会のご案内と申し込みはつきを同封いたしました。たくさんの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

● 2010年度分割会費の納入、ありがとうございます。未納の方には再度、郵便振替用紙を同封させていただきましたので納入をよろしく願っています。なお、残額会費を一括納入いただいても結構です。

● 不要切手、書き損じはがきのご提供、ありがとうございます。ご提供いただくたびに、本会がたくさんの厚意に支えられていることを実感いたします。今後ともご協力をよろしくお願い申し上げます。

● 住所変更は、お手数ですが事務局にご連絡をお願いします。長倉代表の最新刊が9月末に刊行される予定です。山の学校の女の子マジャミン(5年生)を主人公にした写真絵本です。ご期待ください!

● 「ソルハ」(常木達生著・あかね書房)のチラシも同封させていただきます。カプールを舞台に戦渦を生きる一人の少女の成長の物語を通してアフガニスタンの知識や理解が深まります。表紙カバーは長倉代表撮影の「山の学校」の子どもの写真です。



〒187-0032 東京都小平市小川町1-1071-15 比留川 気付
FAX & 留守番電話: 042-345-7805 E-mail: info.yamanogakko@yahoo.co.jp
http://www.h-nagakura.net/yamanogakko
郵便振替口座: 00160-1-667404
編集: 天野みか 岩動葉 大守 裕 佐々木龍紀 水間真紀
題字: イナスト 近藤理恵 デザイン: 浅井充志 印刷: (有)アトタツ

アフガニスタン山の学校支援の会は、写真家・長倉洋海が取材活動を通して出会った、ペンシルバニア州ポークラン村の子どものための教育支援を目的として設立された非営利の団体です。2004年2月に設立、以後2014年3月までの約10年間にわたり活動を続けていきます。